

## 学位論文の内容の要旨

専攻	医学	部門 (平成27年度以前入学者のみ記入)	
学籍番号	18D722	氏名	原田 彰雄
論文題目	Long-term Multidisciplinary Rehabilitation Efficacy in Older Patients After Traumatic Brain Injury :Assessed by the Functional Independence Measure		
<p>(論文要旨)</p> <p>頭部外傷後遺症に対する集学的リハビリテーションに及ぼす年齢の影響 Effect of age on multidisciplinary rehabilitation outcome in patients after traumatic brain injury</p> <p>【目的】頭部外傷後遺症に対する集学的リハビリテーションの効果を年齢層別に比較し、高齢者における特徴と効果を明らかにする。</p> <p>【対象】2013年4月から2020年3月の期間に頭部外傷後遺症に対しリハビリテーション目的で入院した63例(年齢9~87歳、男性55例)を対象とした。症例を24歳以下(14例)、25-44歳(15例)、45-64歳(15例)、65歳以上(19例)の4群に分け、入院時と退院時の認知および運動FIM(Functional Independence Measure)を比較し、年齢群別の集学的リハビリテーションの効果を検討した。</p> <p>【結果】受傷原因は、交通事故が35例、転倒・転落が28例で、高齢になるに従い転倒・転落の割合が増加した。受傷時のGCSは、65歳以上で有意に高値であった。入院時の認知FIMは65歳以上で低い傾向にあり、退院時の認知FIMでは65歳以上で有意に低値(<math>p&lt;0.01</math>)であったが、入院時と退院時の認知FIMの差(利得)では年齢群間に有意差はなかった。また入院時の認知機能検査(MMSE)と認知FIM利得に有意な相関はなかった。一方、運動FIMに関しては入院時退院時とも65歳以上で有意に低値(<math>p&lt;0.01</math>)であったが、入院時と退院時の運動FIM利得では年齢群間に有意差はなかった。自宅以外が転帰先となったのは、それぞれ0/14例、2/15例、3/15例、6/19例であり、65歳以上で多い傾向があった(<math>p=0.12</math>)。退院時に向精神薬の投与が必要であった症例は、それぞれ3/14例、5/15例、4/15例、6/19例であった(有意差なし)。</p> <p>【結論】65歳以上の高齢者においても他の年齢群と同程度にリハビリテーションの効果が認められ、年齢にかかわらず積極的なリハビリテーションが勧められる。しかし、一部の高齢者では改善がほとんど得られず、退院時に自宅外退院となる症例が散見した。高齢者頭部外傷患者におけるリハビリテーション効果を正確に予測することは、限られたリハビリテーション資源の有効活用の点から重要と思われる。</p>			

掲 載 誌 名	ACTA MEDICA OKAYAMA		第 75 卷, 第 4 号
(公表予定) 掲 載 年 月	2021 年 8 月	出版社 (等) 名	Okayama University Medical School
Peer Review	<input checked="" type="checkbox"/> 有		無

(備考) 論文要旨は, 日本語で1, 500字以内にまとめてください。